

(『ロータリー日本 100 年史』寄稿)

## 「職業奉仕」から「奉仕の理念」へ ～日本のロータリー100周年、そしてその先の未来へ～

RID2840 パストガバナー

本田 博己 (前橋ロータリークラブ)

### ロータリーはどこに行く

「ロータリーはどこに行く？ 昼飯を食べに行く」という言葉は、ご存じの方も多いと思います。皮肉屋で知られるイギリスの有名な劇作家、ジョージ・バーナード・ショーの言葉です。ショーは、1930年のRIBI エジンバラ大会の講演者として招聘されたのですが、それを断って次のように言いました。

「エジンバラまで見に行かなくても、私はロータリーが何処に行こうとしているのかわかる。昼食をしに行こうとしているのだ。いつもこの国でやっているのはそれぐらいだからだ。」(『ポール・ハリス 偉大なる奉仕の先覚者』166 ページ 原題: *THE FIRST ROTARIAN* ジェームズP. ウォルシュ 著 是恒 正 訳 1980)

1930年当時のロータリーに対する世間の認識はその程度だったのかも知れません。しかし、「ロータリーはどこに行く？」というバーナード・ショーが90年前に発した問いを、21世紀の現代に生きるロータリアンの私たち自身、そして私たちのクラブに対する切実な問いとして受け止めたらどうでしょうか。「私たちのクラブはどこに行く？」、「日本のロータリーはどこに行く？」という問いに私たちは明快に答えることができるのでしょうか。

### ロータリーは歴史的な転換期

2016-17年度 国際ロータリー ジョン F. ジャーム会長は、全世界の地区大会に寄せたRI 会長メッセージの中で、「今ロータリーは、いわば転換期となる歴史的に重要な局面に立っています。」と、ロータリーの現状認識を表明しています。

ジャーム会長の「歴史的な重要局面」という認識は、2016年4月の規定審議会のガイダンスで発表された『戦略計画の最新情報』という資料に端的に示されています。ここでは、「ロータリーがこの世界、そして時代に沿った存在であり続けるために、私たちは何をすべきだろうか。」と問いかけています。

「ロータリーは時代に追いつき、適応しなければならない。ロータリーは、次なる100年間に存続していくために、ビジョンを備えなければならない。」

「私たちは、次なるステップを判断するためにロータリーの使命に目を向け、ロータリーの独自性を守るために価値観を忘れず、次の100年に向けて前進し

ていくために新たなビジョンを築いていく。」

この『戦略計画の最新情報』で示されているのは、時代認識を踏まえた RI の危機意識とビジョンづくりへの決意の表明ではないでしょうか。

## RI の新しいビジョン声明

この RI の決意は「ビジョン声明」で明確に表明されました。「ビジョン声明」は 2017 年 6 月の RI 理事会で決定され、2018 年 1 月の国際協議会で正式に打ち出されました。

### ビジョン声明

私たちは、世界で、地域社会で、そして自分自身の中で、持続可能な良い変化を生むために、人びとが手を取り合って行動する世界を目指しています。

### Vision Statement

**Together, we see a world where people unite and take action to create lasting change – across the globe, in our communities, and in ourselves.**

日本語訳ではうまく読み取れませんが、英語原文の冒頭に “Together” という言葉があります。私たちは共に、一緒になって永続的な変化を生み出そう、と呼びかけています。この声明が、私も RI 研修リーダーとして参加した 2018 年の国際協議会で発表された日の本会議では、各スピーカーが、スピーチの最後に、決め台詞のように、この “Together” という言葉を使っていたのが印象的でした。

RI 戦略計画におけるビジョンづくりに呼応し、それを踏まえて、クラブも地区も、そして日本のロータリー全体も、ロータリーの大きな歴史的転換期を乗り越えるため、共に新たなビジョンづくりに取り組むときではないでしょうか。

## ロータリー100周年（2005年）の後悔

私がビジョンづくりの必要性を強く思うのは、10数年前にその機会があったのに、逸してしまったのではないかという後悔の念があるからです。

2005年6月シカゴで開催された第96回国際大会で、私たちはロータリー100周年を祝いました。その年度のテーマは「ロータリーを祝おう」でした。

翌2005-06年、奉仕の第2世紀のスタートに当たって、カール・W・ステンハマーRI会長は年次テーマに、ロータリアンが長く親しんできた標語「超我の奉仕」“Service Above Self”を選びました。

ステンハマー会長は、この標語ほど「的確にロータリーとロータリアンの精神を言い表している言葉は」なく、「ロータリアンを鼓舞する最も意義深い言葉」であるとしています。そして、「来たる年度、すべてのロータリアンに『超我の奉仕』の真の意味をじっくりと考えていただく機会が与えられます。そして、

この思いやりと寛容の精神に満ちた普遍的メッセージに、新たな思いを抱かれることになると思います。」と語っていました。

ただ、“Service Above Self”という言葉が示す意味は必ずしも自明ではありません。「最も意義深い言葉」とは言うものの、ステンハマー会長は、注意深く(?)その意味の解説は避けているようでした。

その時、私たちがステンハマー会長の呼びかけに真摯に向き合って、“Service Above Self”や「奉仕の理念」の真の意味をもう少し深く議論していたら、それに照らしてRIの方向性ととも私たちの現状と課題をもう少し深く検討していたら、そして、具体的な課題解決に着手していたら、日本のロータリーの現在の状況(大幅な会員減少に象徴される)、そしてRIとの関係は違ってきていたのではないか、と思うのです。

### 日本のロータリー100周年～日本のロータリーはどこに行く？

2020年は、東京ロータリークラブが創立した1920年から100年。つまり、日本のロータリー100周年という大きな節目の年です。私には、今度こそこの機会を逸してはならないという強い思いがあります。

日本のロータリー100周年に向けて、2016年7月、北清治元RI理事を委員長として「日本のロータリー100周年委員会」が設立されました。私はその中の、ビジョン策定委員会委員長として、日本のロータリーの現状と課題を踏まえた、次の時代の希望あふれるビジョン(将来像)を描く活動に取り組んでいます。

私は、現在の日本のロータリーと国際ロータリーとの間には残念ながら不幸な現状があると考えています。日本のロータリーは、世界全体のロータリー運動の中で、大きな潮流や変化に取り残されつつあるように見えます。

1996-97年にロータリーの会員数は120万人に達しました。その後、毎年「会員増強」が最優先テーマに掲げられていますが、20年以上経過した今も120万人前後で停滞する状況が続いています。一方、日本のロータリーの会員数のピークは、同じく1996年11月末の131,343人でした。現在は約89,000人(24年前の32%減)となり、ゾーン編成も3ゾーンから2.5ゾーンになりました。こうした現状をどう評価すればよいのでしょうか。

RIの方向性や現状に疑問や不満を感じる日本のロータリアンも益々増えており、このまま意識のギャップが拡大してゆけば、日本のロータリーが世界のロータリーの中で孤立してゆくことが懸念されます。

少し極端な言い方ですが、戦略計画や財団の補助金モデルに象徴される国際ロータリーの方向性に背を向けて日本独自の孤立路線を歩むのか、それとも世界的ネットワークの重要な一員として、理念と活動の両面で21世紀のロータリー運動の方向性を示すリーダーシップを発揮できるようになるのか、日本のロータリーは二つの道のどちらに向かおうとしているのか、大きな岐路にあるの

ではないでしょうか。

そのときに壁（障害）となりかねないのが、ロータリーの理念や実践に関する日本のロータリーと世界のロータリーとの認識のずれです。

### 個人的な体験～東日本大震災で私たちを突き動かした動機とは？

日本の明治期に啓蒙思想家・教育者として活躍した福沢諭吉(1835-1901)は、幕末と明治という二つの時代をほぼ半々に生きた人でした。その福沢諭吉が『文明論之概略』(1875)の緒言で「恰も一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し」と感慨をもらしています。自分の体は一つだが、明治維新の前後では、まるで違う二つの人生を生きているようだ、というのです。私も9年前、似た心境を味わいました。

2011年3月11日の東日本大震災は現代日本人にとって大きな衝撃でした。原発事故も含めたあの災害は日本の運命を変えましたが、私の価値観や生き方、人生を変える大きな出来事でもありました。

2014年に、5年に1回行われる、統計数理研究所の「日本人の国民性 第13次全国調査(2013年)」の結果が発表されました。調査によると、日本人の長所として「勤勉」「礼儀正しい」「親切」「心の豊かさ」等の項目が過去最高のスコアだったそうです。また自分の周りの人が「他人の役に立とうとしている」とみている人は45%で、2008年の前回調査より9ポイント上昇しました(調査が始まった35年前の2.4倍)。一方、「自分のことだけに気を配っている」と考える人は前回より9ポイント低下し42%と、「利他的」な回答が「利己的」な回答を逆転し上回った結果でした。

2008年の前回調査と今回2013年調査の間、2011年に、私たちは東日本大震災を経験しました。明らかに、その時を転機に、国民の意識の中で利他的心情が利己的心情を上回るようになったのです。調査をした統計数理研究所は、「戦後社会が成熟するにつれ、ボランティアなどの公共性が高まってきた。…日本人が示した(東日本大震災)被災地のための行動が、今回の調査結果に色濃く反映されているようだ」(『産経新聞』2014年10月31日)と分析しています。

9年前、東日本大震災という大きな出来事に直面した私たち日本人は、誰もが已むに已まれぬ気持ちで自発的に被災者支援に動きました。日本のロータリアンとクラブも同様に、被災者や被災地区の支援に全力を注ぎました。そのとき、ロータリアンとしての私たちの心を突き動かし行動の支えになったのは、「奉仕の理念」という言葉で示される理念と心情でした。「職業奉仕」という言葉ではありません。

私は、東日本大震災後に、日本全体で見られた相互扶助(被災者同士、そして日本だけでなく世界からの支援)や多くのロータリアンの様々な復興支援活動に、後ほど詳述しますが、ロータリーのDNAといってもよい「相互扶助の精

神」を根底とする「奉仕の理念」の可能性、私の表現でいえば「ロータリーの希望」を強く感じるのです。

### 「職業奉仕」という言葉～日本と日本以外のロータリアンの使い方の違い

私が「職業奉仕」“Vocational Service”という言葉で、日本以外のロータリアンと日本のロータリアンが明らかに異なる内容を語っていることをはっきり認識したのは、2012年バンコク国際大会の職業奉仕に関する分科会でのことでした。「職業奉仕」の分科会はすべて英語で進行したので、私がどこまで理解できたかは自信がないのですが、日本のロータリアンは、私たちにお馴染みの「職業奉仕」の理念を熱心に語り、一方、日本以外のロータリアンは、「職業奉仕部門」の活動事例を語り、両者は噛み合わないままに分科会は終わったのです。「同床異夢」という言葉が頭をよぎりました。

### 『ロータリーの希望 — 「奉仕の理念」とその実践をめぐって— 』

私はガバナー年度(2013-2014)の月信に毎月のガバナーメッセージとは別に、「ロータリーの誤解・正解」という連載コラムを執筆しました。最初は単に米国発祥のロータリーの、文献や用語の英語原文と邦訳の語義のずれやそれに伴う多くの日本ロータリアンのロータリー理解に対する私の違和感を伝えようと思って始めたのですが、ガバナー職を務める日々の思いや全国のロータリアンの皆様との交流、ガバナー職としての様々の得難い貴重な体験が連載の内容や方向を次第に変えてゆきました。

連載のタイトルを辿ると、「ロータリーの目的」「五大奉仕部門」「職業奉仕」「奉仕の理念(理想)」「リーダーシップとインテグリティ」等々、これから本稿で展開してゆく議論の大筋がすでに示されています。

不十分ですが、ロータリーの「奉仕の理念」とその実践についての本質的論議や問題提起を、少しは私なりに示すことができたのではないかと考えています。(のちに加筆・修正し『ロータリーの希望 — 「奉仕の理念」とその実践をめぐって— 』とタイトルを変更しPDF文書にまとめた。)

### 「職業奉仕」はロータリーの根幹か？(『ロータリーの友』2017年1月号寄稿)

その後、各地のロータリーセミナーで「職業奉仕」や「奉仕の理念」に関する講演を依頼されることが多くなりました。2017年の『ロータリーの友』1月号には、『「職業奉仕」は、ロータリーの根幹か?』という、いささか挑発的なタイトルの文章を、職業奉仕月間の企画で寄稿しています。寄稿の要旨は以下の通りです。

従来語られてきた日本の「職業奉仕」論と、RIが推奨する「職業奉仕」は、内容が異なる。「職業奉仕」という言葉で、世界のロータリアンは、奉仕部門の一つとしての職業奉仕の活動を語り、一方、日本のロータリアンは、「奉仕の理

念」の職業への適用や自分自身の職業観を語っている。

私の提案は、「職業奉仕」という言葉で「奉仕の理念」（の職業への適用）や自分の職業観を語ることをいったん止めてみる。そして、クラブの活動のための枠組みである「五大奉仕部門」(Five Avenues of Service)の第二部門 (second Avenue) である「職業奉仕部門」の活動だけに「職業奉仕」という言葉を使おう。しかし、これは日本の伝統的な職業奉仕論の本旨を否定しているわけではない。

「職業奉仕」という言葉ではなく、世界共通の「奉仕の理念 (奉仕の理想)」(The Ideal of Service) という言葉で、ロータリーの理念についての議論を深めてゆこう、というのが私の提案の真意。なぜなら、ロータリーの目的は、奉仕の理念を奨励し、これを育むことであり、「奉仕の理念」がロータリーの根幹であるから。

要約すればこれだけなのですが、「日本のロータリーのガラパゴス化」という少し強い言葉を使ったこともあり、特にベテラン会員の方々からの反発は相当多かったように思います。以下、もう少し詳しく私が寄稿で主張したことの背景や根拠を示します。

#### 「ロータリーの目的」と「五大奉仕部門」

「ロータリーの目的」が、RI 定款とクラブ定款の両方に掲げられています。これは、「目的」が、RI やクラブ、ロータリアンも含めたロータリー全体の目的であることを示しています。「ロータリーの目的」の原文は“Object of Rotary”と単数で示されています。「目的」は一つなのです。

四項目の前文のように見える最初の二行が、実は主文で、ここにロータリーの目的が端的に表現されています。すなわち「意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励しこれを育むこと」。これがロータリーの目的です。後に続く四項目は、主文の目的を達成するためにロータリアンが如何に行動・実践すべきかが書かれており、主文の補足説明となっています。四項目が奉仕部門（かつての四大奉仕）の説明というわけではありません。「ロータリーの目的」の原文は四項目も含めて全体で一つの文（末尾にピリオド）となっています。

強調しなければならないのは、ロータリーの目的は、この「奉仕の理念」を奨励し育むこと の一点であるということです。

一方、「五大奉仕部門」はクラブ定款にしか掲げられていません。「五大奉仕部門」は、クラブの活動のための枠組み (framework for the work of this Rotary club) だからです。標準ロータリークラブ定款の第6条に「五大奉仕部門」の定義が示されています。各部門の定義にはそれぞれ、具体的な会員の行動やクラブの活動を促す言葉が並んでいるのですが、これまで、職業奉仕部門だけには具体的活動が表現されていませんでした。

## 職業奉仕部門の定義の改定

2016年の規定審議会で、「制定案 16-10 奉仕の第二部門を改正する件」が採択され、奉仕の第二部門である職業奉仕部門の定義が改定されました。

### 第6条 五大奉仕部門

2. 奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を実践していくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うこと、そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる。

このアンダーラインの部分が、加わったのですが、これによって五つの奉仕部門すべてに、会員に求められる「行動」、「活動」が明記されたのです。

この追加に「RIは職業奉仕の定義を変えたのか」と、驚いた日本のロータリアンが多かったようです。しかし、これは30年以上前にRIが示した「職業奉仕」の大方針が明文化されただけなのです。

1987年にRIは『職業奉仕に関する声明』を発表しています。この中で「職業奉仕は、ロータリークラブとクラブ会員両方の責務である。」とし、会員の役割として「クラブが開発したプロジェクトに応えること」が明確に示されています。日本では、「職業奉仕」について、このRIの大方針を30年以上無視した議論が続いてきたというのが真相です。

### ロータリークラブの奉仕部門の一つとしての「職業奉仕」

世界のロータリーでは、自分の職業上のスキルを生かした奉仕活動は、個人が行うものであれ、クラブが行うものであれ、すべて立派な「職業奉仕」の活動として活発に実践されています。国際ロータリーが定義している「職業奉仕」とは「ロータリークラブの奉仕部門の一つ」としての「職業奉仕」なのです。

RI発行の『職業奉仕の手引き：実践しよう』（255-JA）という資料があります（以前は『職業奉仕入門』という邦題が付けられていました）。職業奉仕部門の活動のための公式の手引き書です。この手引き書には、「行動しよう」という見出しで、職業奉仕を実践する方法や具体例が紹介されています。そして、これらの活動や、類似した活動をクラブで実施することを奨励しています。

その活動事例の最後に、「職業研修チーム（VTT: Vocational Training Team）」が取り上げられています。VTTは、ロータリー財団のグローバル補助金を使う事業の一つですが、RIはVTTも「職業奉仕」の事例としているのです。

表題の「実践しよう」（IN ACTION）や、文中の見出し「行動しよう」（TAKE ACTION）で明らかのように、職業奉仕の理念の奨励・研鑽だけでなく、クラ

ブとしての職業奉仕の活動が強く求められています。

### 「職業奉仕」の解釈の違い？

日本と RI の「職業奉仕」の違いは、単に解釈の違いだ、解釈は違ってよいのではないか。日本は日本の「職業奉仕」論を大切にしたい！と言う人も多いのですが、RI が示しているのは解釈ではなく定義です。「職業奉仕委員長」に任命され、上記の『職業奉仕の手引き』をどのように扱うか困っている人も多いようです。RI の手引き書で奨励されていることを無視して、日本のロータリアンの耳に心地よい「職業奉仕」論を語ることで済ませる職業奉仕委員長も多かったのではないのでしょうか。

### 日本の「職業奉仕」論は「職業倫理」論

私はこれまで錚々たる日本のシニアリーダーの方々が伝統的に語ってこられた立派な「職業奉仕」論がすべて間違っていると異を唱えるつもりはないのです。「職業奉仕」の基となっている理念を大事にするのはよいのですが、そのことだけを語るだけでは、多様で豊饒なロータリー運動の一面しか見ていないこととなります。

日本で語られてきた「職業奉仕」論の多くは「職業倫理」論ではないのでしょうか。日本のロータリアンが得意な「職業奉仕」論は、世界では「(職業) 倫理」“(Vocational) Ethics” というテーマで扱われています。

ロータリーは初期のころから現代に至るまで職業倫理や高潔性を大事にし、強調する集団であり続けていることは間違いありません。しかし、これは初期ロータリーの時代には存在しなかった (1927 年まで) 「職業奉仕」という言葉を使わなくても十分説明できます。そして、現代においても「倫理」(Ethics) や高潔性 (Integrity) がロータリーの重要概念であることは世界共通の認識です。

1915 年に制定された『全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓』(別名『道徳律』) は、当時、多くの業界で職業倫理の向上に大きく寄与しました。

「ロータリーの目的」の第 2 項には、「職業上の高い倫理基準を保ち、…ロータリアン各自の職業を高潔なものにすること」と謳われています。

5 か条からなる『ロータリアンの行動規範』の第 1 条には「個人として、また事業において、高潔さと高い倫理基準をもって行動する。」とあります。

2016-17 年ジョン・ジャーム RI 会長は、就任前のインタビューで、「全てのロータリアンが持つべき、中核となる資質と人格とは、どのようなものでしょうか？」と問われて、「最も大切な中核的価値観は高潔性 (Integrity) です。高潔性がなければ何もないのと同じです。」と答えています。

昔も今も、高い職業倫理感を持った高潔な人格が私たちロータリアンには求

められています。日本の伝統的な「職業奉仕」論はこのことを強調しているのだと思います。

### 「奉仕の理念（理想）」の意味とは？

繰り返しますが、「職業奉仕」ではなく、「奉仕の理念（理想）」がロータリーの「目的」の中心概念です。

「奉仕の理念」(The Ideal of Service) がロータリーの根幹を示す言葉であるのなら、「奉仕の理念」の意味がわかれば、ロータリーの理念の理解は容易になるはずですが、ところが、「奉仕の理念」の意味をきちんと説明したロータリーの文献がなかなか見当たらないのです。

これまで、RI の『公式名簿』(Official Directory) 巻末に、以前記されていたチェスレー・ペリーの言葉「全世界のロータリークラブは一つの基本理念 —『奉仕の理念』を持っている。それは他人のことを思いやり、他人の助けになることである。(thoughtfulness of and helpfulness to others)」が「奉仕の理念」の意味を示した唯一の公式文献の記述とされていました。そこで、「奉仕の理念」の意味を説明するとき、これまではこの言葉を引用する人が多かったのです。

### 『目標設定計画』に書かれた「奉仕の理念」の意味

ところが、ずっと古い文献、「奉仕の理念」という言葉がロータリーでキーワードとして定着した頃、「奉仕の理念」の意味を説明した文章があるのです。

1931年にRIが発行した、『目標設定計画』(The Aims and Objects Plan) という53ページほどのパンフレットです。このパンフは1927年に決まった、『目標設定計画』に基づく四大奉仕部門の意義と適用の方法を解説したもの(何回目かの改定版)です。

そのパンフの中で、「ロータリーでは、これまで“The Ideal of Service”の意味するところを様々な言い方で表してきた」として、以下の四つの言葉を列挙しています。(原文24ページ)

一つめは、“Service Above Self”「超我の奉仕」。二つめは、“He Profits Most Who Serves Best”「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる」。三つめは、“thoughtfulness of others”「他人への思いやり」。四つめは、“most of all treating others as one would like to be treated”「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という言葉です。

当時のロータリアンは、「奉仕の理念」を、以上四つの言葉を包含した意味として理解していました。あるいは、四つの言葉は、彼らにとって、「奉仕の理念」の内容を示す同意義の言葉であったともいえます。

三つめと四つめの言葉を先に解説します。

三つめの「他人への思いやり」という言葉は、これまで多くの人が引用して

きた『公式名簿』巻末のチェスレー・ペリーの言葉、「他人のことを思いやり、他人の助けになること」と同意だと考えてよいでしょう。

四つめの「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」という言葉は、『新約聖書』の「マタイによる福音書 7 章 12 節」の通称「黄金律」と呼ばれる有名な一節です。

この「黄金律」は 1915 年の『道徳律』の末尾第 11 条や、ポール・ハリス、シェルドン、米山梅吉の文章など多くの初期ロータリーの文献で引用されています。同様な思想や表現は、キリスト教だけではなく世界中の宗教や古代思想の中にも見られます。一宗教の格言にとどまらない、世界共通の普遍的な価値観を表現した言葉と言えます。

### ロータリーのモットー（標語）

さて、一つめと二つめに戻ります。一つめと二つめの言葉は、それぞれ、ロータリーの第一モットー、第二モットーとして知られています。

第一モットーは、「超我の奉仕」“Service Above Self”。そして、第二モットーが、アーサー・フレデリック・シェルドンの言葉で知られる「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」“He Profits Most Who Serves Best”です。

重要なのは、初期のロータリアンが、この二つのモットーがともに「奉仕の理念」の意味を表していると認識していた、ということです。

この二つのモットーの日本語訳については、昔から議論がありました。特に、第一モットーの「超我の奉仕」は「超我」が造語でもあり、カッコよいが意味がよくわからない、といわれていました。日本のロータリーの創始者である米山梅吉さんは、これを「サーヴィス第一、自己第二」とか「自己に先立つサーヴィス」と訳しました。「超我の奉仕」より原義が伝わると思います。

第二モットーも、「最善のサービスをすれば、結果として最大の利益が得られる」とでも訳したほうがわかりやすいでしょう。

### 二つのモットーを一体化して捉える～一つの理念

日本では、これまで、「職業奉仕」という言葉は強調されても、「超我の奉仕」や「奉仕の理念」はあまり語られてきませんでした。

図式的に、アーサー・シェルドンの「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる」というロータリーの第 2 モットーは「職業奉仕」を表明しており、第 1 モットーの「超我の奉仕」や「奉仕の理念」は人道的奉仕（や「社会奉仕」）を表明した言葉であると、二つのモットーを、それぞれ二つの理念を表現する言葉として説明する人もいます。本当にそうなのでしょうか？

初期のロータリアンは、二つのモットーを「奉仕の理念」の意味を示す同意義の言葉として理解し、二つのモットーを一体のもの（セット）として見てい

ました。ロータリーには、二つの理念があるのではなく、一つの理念なのです。

シェルドンが 1921 年のエジンバラ大会で発表したスピーチ原稿（『ロータリーの哲学』）では、モットーを一つのモットー（the motto: 単数）として“Service Above Self – He Profits Most Who Serves Best”とダッシュ（一）で繋ぐ一体化した形で示しており、ロータリーのサービス哲学の真髓を、この「一つのモットー」の中の“Service”、“Self”、“Profit”という三つの概念の本質とそれらの関係を説明することによって浮き彫りにしようとしています。

ロータリーの奉仕の哲学を表明していると現代のロータリアンも認めている（2010年規定審議会採択決議案 10-182）、有名な「決議 23-34」（1923年）の第1条でも同様に、この二つのモットーは、セットで示されています。

#### 決議 23-34 第1条

ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。

この哲学は奉仕—「超我の奉仕」—の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである。

この二つのモットーを全体として一つの主張として捉えると、ロータリーモットーの真意は次のようになると考えられます。

相手に対するサービスを自己の利益や都合より優先させよう。利益はサービスの結果である。相手のために最善のサービスをすれば、結果として最大の利益（金銭的な利益だけでなく満足感・幸福感も含む）が得られる。

ここで主張されている思想こそ、「奉仕の理念」の核心です。そして、注意しなければならないのは、これは決して利益を求めて奉仕するという「功利主義」的な思想ではなく、他人のために役立つことが自らの幸せ（喜び）であるという、他者（ひと）に奉仕すること自体を目的とする「利他主義」の思想だということです。

#### 現代ロータリーにおける“Service”の意味

アーサー・シェルドンが「Serviceの哲学」を提唱した時、“Service”という言葉は、「正しいビジネスの方法」を示す概念でした。

そのシェルドンの時代から、100年後の現代では、ロータリーの“Service”の分野は広範囲に広がっています。1927~28年に確立した「四大奉仕」は、2010年には「青少年奉仕」を加えて「五大奉仕」となりました。1985年から始まったポリオ・プラス・プログラムは、“END POLIO NOW”としてポリオ根絶の最終局面を迎えています。2000年代に入って、国際ロータリーは「戦略計画」を策定し、「人道的奉仕」の分野に重点を置く方向性を打ち出しています。2013

年からは、ロータリー財団の新しい補助金モデル（「未来の夢計画」）も始まりました。このように活動分野が広がった現代ロータリーにおいては、ロータリーのすべての奉仕部門を通じて、“Service”をその最も広い意味で使うようになっていきます。

すなわち、「人々の助けとなること」、「社会の役に立つこと」、「世のため人のために尽くすこと」。

ただし、シェルドンが「Serviceの哲学」を主導した時代でも、ロータリーでは“Service”をビジネスに適用される言葉だけではなく、より広い意味を込めて使われ始めていました。シェルドン自身が「学問的に解釈すれば、奉仕とは『役だつこと』の別名に過ぎません。」（「モットー He profits most who serves bestの真意」田中毅訳）と述べ、ポール・ハリスは、「『役に立つ』という語は『奉仕』というよりも仰山でなく寧ろ適切である。」（『ロータリーの理想と友愛』米山梅吉訳）と述べています。

### 「奉仕の理念」とは

“The Ideal of Service”を、私は「ロータリーが考え実践してきた究極の“Service”のかたち」と言い換えています。

ロータリーの「奉仕の理念」を私なりに要約すれば、世のため人のために自分もっている能力を全力で心をこめて捧げること、そうした利他の精神が自分の幸せにつながる、そして自分を活かす道である、ということです。

「ロータリーの目的」は、次のように言い換えることができます。ロータリーの目的は、「奉仕の理念」を広め、その価値を高めてゆくことである。そして、理想のロータリアンとは、個人生活・職業生活・社会生活等、人生のすべての面で、「奉仕の理念」の研鑽と実践を行う人である。

### ロータリーの根幹は「奉仕の理念」

ここまでの議論の要約をしておきます。

1. 「奉仕の理念」がロータリーの理念と実践の根幹である。2. 「職業奉仕」の定義は RI が明確に示している。それは、「五大奉仕部門の一つとしての職業奉仕部門」である。3. 日本の「職業奉仕」論は、職業倫理論。4. ロータリーの“Service”は、活動の広がりに伴い、最も広い意味で使われている。5. 「職業奉仕」という言葉ではなく、「奉仕の理念」とその実践について語ろう。

伝統的な「職業奉仕」論の思い込みを脱しなければ、ロータリー運動の全体像は捉えられないし、いつまでたっても世界のロータリーと共通言語で対話することもできないと考えます。

## 「奉仕の理念」の原点としての「相互扶助」(Mutual Helpfulness)

ここまでは、日本の伝統的な（といっても最近 30～40 年ぐらいの）「職業奉仕」論から離れて、初期のロータリアン（特に 1920 年代ぐらいまで）の文章を読み解くことで得られた見解、伝統的な議論に対する私の疑問、問題提起を述べてきました。以下は、同じく初期のロータリアンが残した言葉に導かれて思い至った、「奉仕の理念」についての私見です。

初期のロータリーで、異業種の中小事業主たちであったクラブの会員同士が、お互いに商売の取引をして助け合っていたことを、私たちは「物質的相互扶助」という言葉で表現しています。そして「物質的相互扶助」から「精神的相互扶助」すなわち「職業奉仕」へ発展していった、というのが日本の職業奉仕論が描く代表的な図式です。果たしてそういうことなのでしょうか。

「相互扶助」“Mutual Helpfulness”という言葉は初期のロータリアンがよく使う言葉でした。ポール・ハリスの“*This Rotarian Age*”に次のように書かれています。「相互扶助 (mutual helpfulness) の観念は、一般的な助け・役立ち (general helpfulness) の観念にその席を譲った。それを象徴するのが “service” という (ロータリー独特の) 言葉である。」(71 ページ 本田訳)

つまり、会員同士の助け合いから一般的な助け・役立ちへ広げてゆくキーワードが “Service” という言葉であったのです。

「物質的相互扶助」から「精神的相互扶助」へ、ではなく、「相互扶助」に “Service” の観念が加わり「一般的な助け・役立ち」へ、すなわち「相互扶助」を外部（社会）へ拡張したものが、ロータリーの「奉仕の理念」に他なりません。

「超我の奉仕」“Service above Self” の原型とされている、ミネアポリス・ロータリークラブのベンジャミン・フランク・コリンズの “Service, not Self” という言葉は、かつて「自己滅却の奉仕」とか「無私の奉仕」と訳されてきたような精神的要素はなく、クラブの仲間同士の取引を外部にも広げようというぐらいの意味（「自分たちのためだけでないサービス」）だと、コリンズのスピーチ原稿を発見し翻訳した 2680 地区の田中毅パストガバナーが指摘しています。

シェルドン作の第 2 モットーが最初に発表された 1910 年の年次大会では “He profits most who serves his fellows best” と “his fellows” という言葉が付いていました。翌年の大会では、“his fellows” が抜け落ちた今の形になるのですが、これも自分たちの仲間内や関係者に限定して適用される原則から、広く一般に通用する原則に修正されたということだと思います。

初めてのロータリークラブが誕生した当時、シカゴ市には仲間同士の相互扶助を目的とする互助会は無数に存在したようです。その中でロータリークラブが唯一生き残り、発展してゆけたのは、社会とのつながりを持ったこと、相互扶助を「奉仕の理念」へと昇華させることができたからではないでしょうか。

## 相互扶助の精神 (spirit of mutual helpfulness)

お互いに助け合う、お互いに分かち合うという、素朴ですが力強い「相互扶助の精神」は、20世紀初頭の時代風潮（加熱する自由主義経済）の中で、どちらかと言えば経済的・社会的には弱者の中小事業主の集まりであった初期のロータリアンの琴線に触れる思想であったようです。

ロータリーの原点と言ってよい「相互扶助の精神」は、「奉仕の理念」に形を変えて、現代にいたるまでロータリーの一貫した思想でした。

RIの初代事務総長を長年務めたチェスレー・ペリー。ポール・ハリスから「ロータリーの建設者」と呼ばれた草創期のロータリーの中心的指導者の一人です。

そのチェスレー・ペリーが、国際平和・親善が「ロータリーの目的」（綱領）の一部となって間もない頃（1921年）、次のような言葉を残しています。

「協力と親善がこれほど必要とされることは今までになかった。利己主義と不信と恐れが蔓延すれば、災難が不可避の結果となる。世界の福祉のためには、より良い生活条件や健康状態の恩恵……を相互扶助の精神 (spirit of mutual helpfulness) で万人の間で分かち合うことが必要だ」(『奉仕の一世紀』デイビッド C.フォワード 159 ページ)

今からおよそ100年前、1914年に始まり1918年に終わった、ヨーロッパを主戦場にした第一次世界大戦（米国は1917年に参戦）は、当時の世界にとって大きな衝撃でした。第一次世界大戦の衝撃と教訓から国際連盟が設立されたのが1920年です。そして、ロータリーでは「ロータリーの目的」（綱領）に「国際平和と親善の促進」が加わりました。1921年のことです。

そうした危難の時代に、先のチェスレー・ペリーの言葉のように、ロータリアンが大事に育ててきた「相互扶助の精神」が強調されたのです。

### 「奉仕の理念」は深化・成長している

確固たる理念がその組織の方向性を定め、発展してゆく原動力となります。理念はころころと変わるようなものではありません。

「不易流行」という言葉を使って、ロータリーの理念は不変だが、方法や奉仕実践の分野、組織運営のあり方は時代の要請に適うべく変化させてゆくべきものだ、とシニアリーダーが解説することがあります。

私もこの意見に概ね賛成ですが、ロータリーの「奉仕の理念」は、それが生まれた初期ロータリーの時代のままではありません。「奉仕の理念」は、100年以上の奉仕の実践を通して、奉仕することの喜びを体感したロータリアンの中で磨かれ深化してゆきました。そして現在の私たちロータリアンの実践の中で一層深く、輝きを増し続けています。

数多くのロータリアンによる奉仕の実践の積み重ねによって、「奉仕の理念」という人生哲学は、他者のために尽くすことが即、自らの幸せ（喜び）になると

いう究極の利他主義にまで深化・成長していったといえるのではないでしょうか。

2014年4月、2840地区（群馬）の地区研修・協議会で田中作次 元 RI 会長が『ロータリーの魅力』と題して講演されました。そのとき、私がメモにとった田中元会長の言葉を紹介します。

### 「ロータリーの奉仕とは人のために役立つこと」

「ロータリーでは人を幸せにするために奉仕する喜びを味わうことができる」

「人のために役立つことが自分の喜びとを感じるのがロータリーの魅力だ」

実にわかりやすい言葉で、ロータリーの「奉仕の理念」の真髓を表現しています。

時代の変化や奉仕分野の拡大にも関わらず、「奉仕の理念」は私たちの「事業の基礎として」、そして、ロータリアンの生活全般の最重要の行動原理として不変の価値と意義を持ち続け、更に深化しています。

私たちがロータリアンであるとは、一つの生き方を選択したということだと思います。ロータリーの「奉仕の理念」は、どこか遠くにあって仰ぎ見るものではなく、自分の個人生活・職業生活・社会生活の中に実現すべきものでしょう。そして「奉仕の理念」は、職業人であるロータリアンの拠りどころとなる実践的な人生哲学でもあります。ロータリーの「奉仕の理念」の実践が、社会の中で自分を活かす道であり、社会をよい方向に導く強い力をもっていることを私たちはもっと信じてよいのではないのでしょうか。

### 「奉仕の理念」を実践し発信しよう

「奉仕の理念」(The Ideal of Service) がロータリーの中核概念であるにも関わらず、その研究や議論が、日本だけではなく RI やロータリー全体で欠けているのは事実です。

日本の伝統的「職業奉仕」論で培ってきた「職業倫理」や「高潔性」に関する日本のロータリアンの智慧を、共通言語の「奉仕の理念」という言葉で再構成して世界に発信してゆくことが重要ではないのでしょうか。

日本の固定観念的な「職業奉仕」の捉え方と説明の仕方を切り替えなければ、いつまでたっても、世界のロータリーとの溝を埋めることも、対話することもできません。

世界のロータリーとの対話を通して、ロータリーの「奉仕の理念」とその実践について共通認識を醸成してゆく姿勢が必要です。そして何より、「奉仕の理念」を語るだけでなく、その実践が大事であることは言うまでもありません。

「奉仕の理念」をこれからも大事に守り育て、人生やロータリー運動の中で実践してゆけば、より良い世界の可能性と希望が見えてくる、と私は確信して

います。ロータリーの理念を、「職業奉仕」という言葉ではなく「奉仕の理念」という言葉で語り、「奉仕の理念」を実践しよう！というのが、私のシンプルな結論です。

### 職業奉仕から奉仕の理念へ～伝統的「職業奉仕」論を超えて

「職業奉仕から奉仕の理念へ」という本稿の題名自体が現代日本のロータリーの思潮の現状を示しているといえます。本稿をここまで読み進めた方なら題名の趣旨は了解していただけたと思いますが、この題名はおそらく日本以外のロータリアンには意味不明でしょう。

『ロータリーの友』2017年1月号の私の論考についての反響（反発？）がいまだに続いています。そのほとんどは、私の言葉足らずもあって、思い込みによる誤解・誤読です。本稿では触れませんでした。伝統的「職業奉仕」論から派生したと思える不可思議な議論や臆見（「職業」と「奉仕」という矛盾する言葉が合わさった職業奉仕は難しい、ロータリーは“I serve”、報酬を得るサービスが職業奉仕で無償の奉仕は社会奉仕、職業を持たないクラブは職業奉仕できない、・・・）が現在も後を絶ちません。

ネット社会になって容易にロータリー情報にアクセスできるようになって、一層、そうしたロータリーの流説は拡散しているように思えます。私たちは、そうした不毛な論議を超えて、「奉仕の理念」とその実践について、世界のロータリアンにも説得力のある言葉と論理を目指す必要があります。

### 国際協議会 会場入り口に掲げられた「ロータリーのエッセンス」

全世界のガバナーエレクトの研修のため、国際協議会が毎年1月サンディエゴで開催されています。その会場入り口に、「ロータリーのエッセンス（本質）」と呼ばれる三つの言葉が掲げられています。「JOIN LEADERS（リーダーのネットワークへ）」、「EXCHANGE IDEAS（アイデアを広げる）」、「TAKE ACTION（行動する）」の三つです。（2014年以降）

私がガバナーエレクトとして国際協議会に参加した前年（2012年）まで、入り口に掲げられていたのは、三つの言葉ではなく、「入りて学び、出（い）でて奉仕せよ」（Enter to learn, Go forth to Serve）という言葉でした。私は、この言葉がロータリーの言葉の中で一番好きでしたので、上記三つの言葉に代わったと聞いて少々がっかりしたのですが、この三つの言葉はよく考えてみると、確かに、ロータリー運動の本質を端的に表現しています。

私たちがロータリークラブに入会したというのは、「JOIN LEADERS」つまり、リーダーのネットワークへ加わったということです。そして私たちはクラブの中で、「EXCHANGE IDEAS」アイデアを交換し、広げます（入りて学び）。そして、最後に「TAKE ACTION」行動する、奉仕の実践へと向かうのです（出でて

奉仕せよ)。

## 高潔性 Integrity とリーダーシップ Leadership

五つの「中核的価値観」が、2009年11月のRI理事会で承認された「戦略計画」で初めて提示されました。全世界のロータリアンに対する調査に基づくこの中核的価値観は、過去100年以上にわたるロータリーの「奉仕の理念」実践の中で育まれてきた、ロータリアンが共有する価値観を凝縮したものと考えてよいでしょう。

国際ロータリー定款(第5条 会員 第2節 クラブの構成)には、会員の資格・条件が以下のように示されています。

「クラブは、善良さ、高潔さ、リーダーシップを身をもって示し、職業上および(または)地域社会でよい評判を受けており、地域社会および(または)世界において奉仕する意欲のある成人によって構成されるものとする。」

これは2016年規定審議会で、会員資格の柔軟性導入が決議された際、簡略に改定された会員の定義ですが、この中に、高潔さ(Integrity)、リーダーシップ(Leadership)、奉仕(Service: 原文は動詞形 Serve)という3つの中核的価値観が明記されています。

ロータリーは昔も今も、職業倫理や高潔性(Integrity)を大事にしてきた集団だと、前に書きましたが、リーダーシップもロータリーにとって重要な言葉です。

ロータリーは何らかの組織や団体のリーダーの集まりである、ということは、昔も今も変わっていません。私は、リーダーシップの価値を強調するのが、ロータリーの重要な特質であると考えています。

## ロータリーはリーダーシップを鍛錬する道場である

「ロータリーの例会は人生の道場である」という、日本のロータリーの創始者米山梅吉さんの言葉になぞらえれば、「ロータリーはリーダーシップを鍛錬する道場である」と言えるのではないのでしょうか。

スタンフォード大学ビジネススクールのロバート・ジョス名誉教授は、その「リーダーシップ概論」の講義の中で、インテグリティとリーダーシップの関係について端的に表現しています。(『世界最高峰ビジネススクールの「人生を変える言葉」』佐藤智恵・早川書房編集部編:早川書房刊 2013年)

「インテグリティはリーダーシップの核心である」“Integrity is the heart of leadership.”。(記者は「リーダーは常に清廉であれ」と意識している。)

それぞれの地域社会の中で、何らかの組織や団体のリーダーであるロータリアンは、クラブの例会やロータリーの「奉仕の理念」に基づく様々な活動に参

加することで、自らのリーダーシップを鍛錬する機会を得ます。そして、リーダーシップを十全に発揮するには、その人の高潔性が欠かせません。

「奉仕の理念」を掲げるロータリーが、会員のリーダーシップと高潔性を鍛え、「奉仕の理念」の実践を通じて、リーダーとしても人間としても成長する機会を提供していることが、会員にとってのロータリーの最大の価値と言えるのではないのでしょうか。

### 共助社会のリーダーとしてのロータリー運動

組織としてのロータリー、運動 (Movement) としてのロータリーはこれからの時代や社会にどのような役割を果たすことができるのでしょうか。奉仕の第二世紀、21 世紀における日本のロータリー運動の使命とは何でしょうか。

日本では、「自助・互助・公助・共助」という四つの言葉が、高齢社会になって注目されています。一般には、自助は自分のことを自分ですること、互助はインフォーマルな自発的相互扶助、公助は国や自治体等の公的補助、共助は社会保険のような制度化された相互扶助を言います。

近年、「共助」の概念をより広く捉えて、互助や公助では担いきれない地域社会の課題を人々が主体的に支えあう「共助社会づくり」が提唱されるようになりました。内閣府主催の有識者会議である「共助社会づくり懇談会」の資料によると、「共助社会づくりとは、市民がつながり、活力と共助の精神にあふれる社会をつくっていくこと」と謳われ、「地域の課題に対応し活性化を図っていくためには、共助の精神によって、人々が主体的に支えあう活動を促進することで活力ある社会にしていくことが必要」と説明しています。

「相互扶助の精神」から発展した「奉仕の理念」を掲げるロータリー、地域に根差したクラブと世界的ネットワークから成るロータリーという組織は、共助社会にイニシアチブを取ることができる可能性を秘めています。

高齢社会の先進国である日本で、地域に根ざしたロータリークラブが、地域社会の核、共助社会のネットワークの結節点となることを示すことができれば、日本のロータリーは世界のロータリーに対して、そのことを先例として示すことができるのではないのでしょうか。

閉鎖的な伝統的クラブを脱して、地域社会や他クラブ・地区・RI に開かれたクラブとして交流や相互研鑽を深め、地域における存在価値を高めるとともに、世界的ネットワークであるロータリーの特権を積極的に享受するクラブこそが「希望」をつかむことができるでしょう。

### ロータリアンの自問、ロータリーはどこに行く

「ロータリー？」“ROTARY?” というタイトルの古い文書が残されています。(「ロータリー？」“ROTARY?” シカゴ大学出版 1934) その副題には「最も古い

ロータリークラブの要請に基づいたシカゴ大学社会科学調査委員会によるシカゴ・クラブの歴史、業績、将来性に関する報告書」とあります。創立から30年近く経ったシカゴ・ロータリークラブが、自らの組織の価値について、外部の客観的な評価を求めて作成されたものです。

その前書には、シカゴ・ロータリークラブ調査委員会の自問が記されています。「我々は時代の進化に即応しているのだろうか？ ロータリーは世の中の現実と同じくらいの速さで進化しているのだろうか？ 進化の速度は適切なのだろうか？ そのことを十分に理解しながら、会員たちを奉仕しやすい方向へ導くことができるのだろうか？」(田中 毅訳 3 ページ)

この80数年前のロータリアンの自問は、本稿で紹介した2016年の『戦略計画の最新情報』の「ロータリーがこの世界、そして時代に沿った存在であり続けるために、私たちは何をすべきだろうか。」という自問と直結しています。

ロータリーは、このようにいつの時代でも、自らの存在価値を問い直すことを繰り返してきました。先に述べた日本のロータリー100周年を目指して組織されたビジョン策定委員会もこの流れの中に生まれたと考えています。

特に、私が参画しているビジョン策定委員会が注力するのは、日本のロータリークラブの活力の再生です。

(ビジョン策定委員会メンバー:第1地域 2840 地区 本田 博己、第2地域 2620 地区 志田 洪顕 PG、第3地域 2680 地区大室 備PG)

ビジョン策定を進めてゆく上で欠かせない視点は、一つ一つのロータリークラブが元気になるビジョンであること、日本のロータリーの現状と課題を踏まえたものであること、日本のロータリアンの英知を集めること、世界のロータリーと協調してゆけるビジョンであること、だと考えます。

特に、日本のロータリークラブの現状と課題を踏まえたビジョンにするために、日本の全クラブやシニアリーダーに対するアンケートを繰り返しています。

2020年には、ロータリー世界における日本のこれからの役割(希望あふれるビジョン)を示す、日本のロータリー100周年宣言と日本のロータリーの奉仕の第二世紀へ向けた具体的・建設的な方向性と方策をビジョンレポートとして取りまとめる計画です。

## 日本のロータリーの役割とは

2018-2019年 RI 会長のバリー・ラシンさん(バハマ出身)が、会長候補者として面接を受けた時の回答が RI のウェブサイトに掲載していました。

「RI は、顧客であるクラブとロータリアンとのつながりを失ってしまっています。ロータリアン/ロータリークラブと RI との間に効率的で効果的なコミュニケーションがとられることを願っています。RI はクラブの実態を把握できて

おらず、一方クラブはクラブで、RIの組織内で何が起きているのか知ろうとしないものも多くあります。」

RI会長になるラシンさんが、RIとクラブとの間の距離を認識し、そのギャップを埋めてゆく意思を表明していることに、私は希望を感じました。私たちも、RIの動向を理解しRIの方針をしっかりと受け止めた上で、私たちの考えを発信してゆくことが大事ではないでしょうか。

2016年の『戦略計画の最新情報』に注目すべき二枚の図が載っています。「最近まで、ロータリーは自らを「人道的奉仕団体」として位置づけ、事業・専門職業・地域社会のリーダーであるという会員の特質の重要性を十分強調してはいなかった。」

「しかし、ロータリーがほかと違う特別な団体である理由は、その会員組織にある。この図の「および」(原文ではand)が重要な要素となる。ロータリーは、『奉仕活動を行っている会員から成る団体』だということである。」と解説しています。

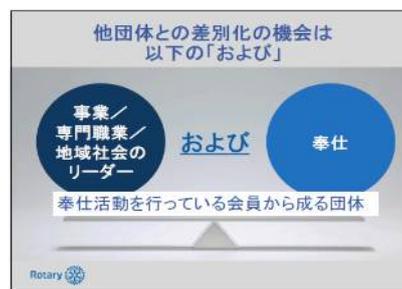
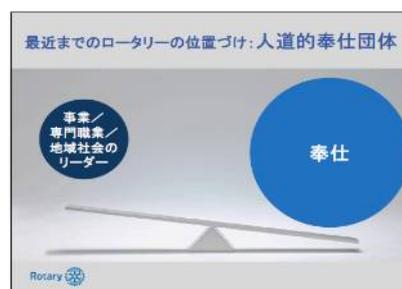
私は、この二枚の天秤図は、「奉仕」「Service」に比重が置かれ過ぎている現状から、「奉仕」「Service」という活動と、事業・専門職業・地域社会のリーダーであるという「会員」「Membership」

の特質とのバランスが取れた状態に戻してゆこう、というRIの現状認識と今後の方向性を示した重要な図であると考えています。バリー・ラシンさんの問題意識も、このRIの認識の線上にあるのではないのでしょうか。

ラシンさんに続く、2019-20年マーク・マローニー会長も、会長候補者のときの「ビジョンと目標の声明」の中で、「クラブこそ、ロータリーの本体なのです。ロータリーは今も、そして今後も、奉仕活動を行う会員組織です」と、クラブや会員の重要性を強調しています。

ロータリークラブの他の組織・団体にはない美質・特質とは何か、ロータリークラブ会員(ロータリアン)の美質・特質とは何か、これからも大事にしてゆきたいロータリーの美質・特質とは何か、を、「職業奉仕」から語り始める従来の固定観念を捨てて、みんなでもっと自由に議論してもよいのではないのでしょうか。

ロータリーの基本的理念に対する本質的な議論や中核的価値観の意義について議論することが、日本においてもRIにおいても極めて不十分なのが現状です。



現在の RI においては、“Service” はほとんど “Activity” や “Action” と同義ですが、本稿で述べたように、“Service” という言葉は究極の利他主義としてのロータリーの「奉仕の理念」の核心です。「活動」 “Serve” の事例を共有することも大切ですが、その前に “Service” の意義をあらためて再認識する必要があります。

一方、日本では、「親睦」が（一番）大事だ、と言う人は多いのですが、“Fellowship” の理想が、日本のクラブ（の例会）で実現したことはかつてあったのでしょうか。「入りて学び」（Enter to learn）が日常的に実践されているクラブがどれだけ存在するのでしょうか。「職業奉仕」理念の理想が実現したことはかつてあったのでしょうか。

今、五つの中核的価値観の一つ一つについて、その意義を世界のロータリーで深く議論する時が来ているのではないのでしょうか。そのとき、「奉仕の理念」はロータリーの中核的概念を示す共通言語として、そしてロータリー運動の価値を一層高める理念として機能するのではないのでしょうか。日本のロータリーの出番はそこにあります。

## おわりに

ロータリーは多面体です。きれいにカットされたダイヤモンドが輝くように、ロータリーはどこに光を当てても輝きます。そしてどの面にも「奉仕の理念」が宿っています。日本固有の「職業奉仕」の一面だけを強調するのではなく、他の面に現れるロータリー運動の輝き、ロータリーの多様で豊饒な魅力を見失わないようにしましょう。

現在の「国際ロータリー」（RI）という呼称が定まった 1922 年頃、ポール・ハリスは、ロータリー運動がどこまで発展していくのだろうか、と心配する周囲の声に、「一番いい時代はこれからだ！」と、いつも答えていたそうです。

（『ポール・ハリス 偉大なる奉仕の先覚者』 P123）

私たちも、2020 年の日本のロータリー100 周年、そしてその先の未来に「ロータリーが一番いい時代はこれからだ！」と確信を持って言えるようにしたいものです。

（2018 年 8 月 30 日脱稿）

（2020 年 1 月補筆）

追加稿

## コロナ禍に直面して

本稿は2018年8月に脱稿し編集部へ提出しました。その後、2回の校正を経てRIの最新情報を盛り込み補筆もしましたが、最終校正の段階で、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言に直面しました。ロータリーの活動もあらゆる分野で停滞を余儀なくされています。本稿が収録される『ロータリー日本100年史』は2020年10月刊行予定と聞いていますので、コロナ禍について触れざるを得ません。本稿の論旨の範囲で、コロナ禍と今後のロータリーのあり方についてコメントしておきます。

本稿の「相互扶助の精神」の項(209ページ)で、およそ100年前の第一次世界大戦は「当時の世界にとって大きな衝撃」であり、そういう時代にロータリーの「相互扶助の精神」が強調されたと述べましたが、同じ頃、いわゆるスペイン風邪が、世界中で猖獗をきわめました。スペイン風邪のパンデミックが第一次世界大戦の終結を早めたともいわれています。1918年からの2年間で世界人口の3分の1が感染し、死者は4千万人とも5千万人とも言われ、第一次世界大戦の死者(約1千万人)をおおきく上回っています。当時の日本人にとっては、第一次世界大戦以上に、スペイン風邪の方が直接生活を脅かす恐ろしい災厄であったのかもしれませんが。

現在、新型コロナウイルス感染拡大により、ロータリーだけではなく、人びとの生活、経済活動、団体活動、働き方や交際の仕方、コミュニケーションの形にまで大きな影響が出ています。緊急事態宣言解除後も影響は長期化することが予測されています。何年か後にコロナ・パンデミックが完全に終息しても、世界のあり方、人びとの交わり方は元の状態に戻ることはないでしょう。

今回のコロナ禍は、100年前、第一次世界大戦がロータリーの価値についてのロータリアンの自覚を促したように、ロータリーのあり方を本質的に自問する機会となるのではないのでしょうか。

本稿で触れた1934年のシカゴクラブの自問、2016年の国際ロータリーの自問に続いて、私たちもこれまでのロータリークラブ、特に「伝統的」なクラブ運営を踏襲してきた多くのクラブにとって、この危機的な状況をどのように克服するか、これからのクラブのあり方について自問自答することが強く求められています。

2020年現在、国際ロータリーは、「ビジョン声明」と5か年の「行動計画」から成る「戦略計画」を、すべての活動の指針・行動原理として強調していますが、「ビジョン声明」はこのままでは空虚な文言に過ぎません。「持続可能な良い変化」(＝永続的变化：lasting change)を地球上、地域社会、自分自身の

中で生み出そうと呼びかけていますが、“lasting change”とは何か、その内実は示されていませんし、議論されることもありません。「ビジョン声明」で目指している世界のビジョン（像）は明瞭ではないのです。現在の「ビジョン声明」で明確に示されているのは“Together, We unite and take action.”ということだけです。

最近のライオンズクラブ国際協会のウェブサイトのトップページには、“Together WE SERVE”という言葉が大見出しになっています。“We serve”というのは、もちろんライオンズの公式モットーです。現在の国際ロータリーの「ビジョン声明」が示しているものは、このままではライオンズとほとんど変わらないという見方もできます。

私たちロータリアン、そしてロータリークラブには「ビジョン声明」の内実を私たち自身が創造してゆくという大きな課題が投げかけられているのではないのでしょうか。

「ビジョン声明」の内実を形作ってゆく拠り所となるのは何か。明らかに私たちロータリアンとロータリークラブは、他の奉仕団体にはない、ロータリー独自の共通の理念・価値観でつながっています。

インターネットはネットワークのネットワークと言われています。コントロール塔のない分散型のインターネットが世界中でつながっているのは、共通の標準化された通信プロトコル（規約）と概念モデルが提供されているからです。ネットワークには、それをつなぐ共通言語が必要です。

ロータリーという世界的ネットワークをつないでいるもの、世界のクラブやロータリアンを結び付けている共通言語とは何かといえば、本稿で詳述した「奉仕の理念」というロータリー独自の理念・価値観です。

本稿の最後で「奉仕の理念」を「ロータリー運動の価値を一層高める理念」と位置付けましたが、今こそ、「ロータリーの目的」や「中核的価値観」、「ロータリアンの行動規範」等と照らし合わせながら「奉仕の理念」についての本質的議論が必要な時なのではないのでしょうか。

コロナ禍の中、各国政府の対応に対して、監視社会や分断社会の到来に警鐘を鳴らす識者がいます。市民レベルの協力と連帯が益々重要となってゆく世界で、ロータリーは様々な社会的課題にどのようにリーダーシップを発揮して対応してゆくのか。ロータリーの存在理由と価値が試される時です。新しいロータリーの哲学が求められる所以です。

2020年と言う日本のロータリー100周年を、アフターコロナの新しい時代のロータリー発展の出発点とできるかどうか、問われています。

(2020年5月30日)

## 引用・参考文献

- 『ポール・ハリス 偉大なる奉仕の先覚者』“*THE FIRST ROTARIAN*”  
ジェームズ P.ウォルシュ 是恒 正 訳 1980
- 『文明論之概略』 福沢 諭吉 1875
- 『日本人の国民性 第13次全国調査(2013年)』 統計数理研究所 2014
- “*The Aims and Objects Plan*” RI 発行 1931  
(邦訳『目標設定プラン』東 昭二 訳)
- 『ロータリーの哲学』“*Philosophy of Rotary*” アーサー F・シェルドン 1921
- “*This Rotarian Age*” ポール・ハリス 1935  
(邦訳『ロータリーの理想と友愛』米山 梅吉 訳)
- 『モットーHe profits most who serves best の真意』シェルドン 1920  
(田中 毅 訳)
- 『奉仕の一世紀』“*A Century of Service*” デイビッド C.フォワード 2003
- 『ロータリーの魅力』(講演) 田中 作治 2014
- 『世界最高峰ビジネススクールの「人生を変える言葉」』  
佐藤 智恵・早川書房編集部編：早川書房刊 2013
- 『共助社会づくり懇談会』(内閣府・有識者会議) 資料 2017
- 『ロータリー?』(田中 毅 訳) “*ROTARY?*” シカゴ大学出版 1934

## RI の公式文書

- 『戦略計画の最新情報』 2016年4月規定審議会 PPT
- 『2019年 手続要覧』「国際ロータリー定款」「標準ロータリークラブ定款」2019
- 『職業奉仕に関する声明』 1987
- 『職業奉仕の手引き：実践しよう』(255-JA)
- 『ロータリアンの行動規範』(200-JA)